公立高校初の人工芝生化
習志野高校グラウンド新装

習志野高校のグラウンドが人工芝生化を終え、3月30日に完成記念セレモニーが開かれた。

県内公立高校では初となる人工芝生化は、サッカー関係者らの待望久しかった。新設工事は平成27年11月から行われ、芝にはサッカーをはじめ、各種スポーツに適しているロングパイル人工芝を採用。グラウンド総面積1万4731㎡に対して、400mトラック内の1万440㎡が人工芝生化された。体育授業の充実や部活動の練習環境が整うだけでなく、強風時には近隣まで飛散していた砂塵が解消されることになった。

新装のグラウンドで開かれたキッズコミット

完成式でリフティングを披露する習高サッカー部員

人工芝生化の工事費は約1億5000万円。地域スポーツのために、日本スポーツ振興センターのスポーツ振興くじ（toto）から地域スポーツ施設整備事業助成として4800万円の決定を受けており、交付が予定されている。新グラウンドは学校活動だけでなく、少年サッカークラブや各種の地域スポーツ団体への貸出しなど地域スポーツの核としての役割も担うことになる。

完成式を前に、新装なったグラウンドでは「キッズコミット.in習志野高校2016」が行われた。「キッズコミット」は、習高サッカー部と父母の会が、子供たちが楽しみながらサッカーのレベルアップを図り、想像力豊かなプレーヤーに育ってもらいたいと催されている。小学生らは真新しい芝の感触を喜びながら、高校生からサッカーのおもしろさと技術を学んだ。

完成記念セレモニーには宮本市長をはじめ習志野市サッカー協会の嶋村清一名誉会長ほか地域の人たちも出席。習高の赤松茂顕校長は「サッカー部のレベルアップとともに、ジュニア世代にとって憧れのグラウンドとして魅力の高まることを期待したい」と述べた。

習高吹奏楽部が完成を祝って記念演奏を行い、体操部が見事な演技を披露し、サッカー部もリフティングなどの妙技を見せた。

習高サッカー部の海田航佑キャプテンは「大会では天然芝、人工芝での試合も多く、同じ環境で練習ができて練習の質も上がると思います。全国の舞台で戦いたい」と意欲を見せている。

習高サッカー部は昭和34年に創部。37年度に第41回全国高等学校サッカー選手権大会に初出場した。出場15回のうち、44回大会、50回大会で全国優勝を果たしている。全国高等学校総合体育大会には通算17回出場し、平成7年度に全国制覇した。

グラウンドの完成を受けて4月1日から3日間、習志野市サッカー協会50周年記念「2016習志野カップ」が開催され、全国から参加した高校サッカーチームが熱戦を繰り広げた。

ハードワークで頂点へ
オービックシーガルズ
自慢の体力ファンに

日本一奪還を目指すオービックシーガルズは3月20日、茜浜の練習グラウンドでファン公開イベント「GーDay 2016」を開いた。

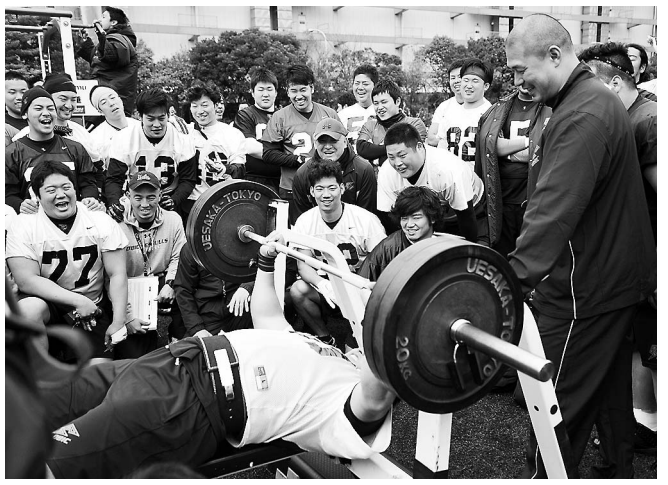
オービックシーガルズは今季、新任の古庄直樹ヘッドコーチの下、「ハードワーク」をテーマに、強いチーム作りをスタートさせている。例年、チーム内で各種目の測定会を行っているが、今回はファン公開で実施された。

210kgのタイヤを持ち上げるケビン・ジャクソン選手

古庄ヘッドコーチは「選手それぞれのすごいところを見て帰って下さい」とファンに挨拶。ハードワークを重ねている選手たちがパフォーマンスレベルを測るため、210kgのタイヤを3回ひっくり返すタイヤフリップ、立ち幅跳び、遠投、250ヤード走などで競った。

100kgのベンチプレス上げの回数では、山本祐介選手が41回で1位になり、オフェンシブラインの面々が力自慢ぶりを発揮。5kgのメディシンボールを背面に投げる重り投げでは、バイロン・ビーティー・ジュニア選手が15・75ヤード、ケビン・ジャクソン選手が15・50ヤードとフィジカルの強さを見せつけた。選手たちの「古庄コール」を受けて、古庄ヘッドコーチも参戦。選手トップに並ぶ記録で健在ぶりを示した。

選手たちを間近にしたファンからは「すごい」の声がもれ、頂点を目指す新生オービックシーガルズの頼もしい選手の姿にファンからは熱い視線が注がれた。チームは4月23日のパールボウルが初戦となる。


ベンチプレス上げに声援を送る選手たち

東邦中高の山岸先生退職
記念の交流戦開かれる

東邦大学付属東邦中高校の山岸良二教諭の退職を記念した東邦中学校と駒場東邦中学校とのバスケットボール交流戦が3月20日、東邦中高第一体育館で開かれた。

両校による交流戦は20年以上続いているが今回、山岸先生が参加する最後の大会として、千葉県下の私立中学4校も加わり催された。山岸先生は日本考古学を専門とし、習志野市文化財審議会会長を務めている。40年以上にわたり歴史などの授業を受け持ち、課外活動では生徒たちに発掘などを行う考古学部とバスケットボールを指導してきた。

交流戦にはかつてバスケットボール部に所属した卒業生も観戦に訪れた。「軽妙で早口でしたが、わかりやすい授業でした。あちこちと動き回る姿は昔と変わりません」と懐かしそうだった。山岸先生は「考古学のために千葉県の職場を選んだが、いろいろな歴史のある土地と温かな習志野の雰囲気が肌に合った。ありがたい教員生活でした」と話した。

山岸先生は教鞭のかたわら歴史に関するテレビ番組にも出演。日本騎兵の父である秋山好古大将や日露戦争などに関する多くの講演活動をこなし、考古学、古代史に関する著書を多数持っている。最新刊の佐藤優氏による企画編集解説の『いっきに学び直す日本史』（安藤達朗著・東洋経済刊）では監修を担当した。「古代・中世・近世教養編」と「近代・現代実用編」各1944円（税込）。

退職記念講演会は「大河ドラマ～朝ドラと東邦歴史夜咄50」の演題で催され、在校生だけでなく地域の人も多く集まった。退職後は大学などで講師を務める。

山岸先生を囲むバスケットボール部員

春の風物詩20年迎える
ハミングさくらまつり

第20回ハミングさくらまつりが4月2日と3日、大久保東小学校を中心に、ハミングロードで開かれた。

ハミングさくらまつりは大久保、本大久保、屋敷など近隣地区の人たちによって催されている。「大久保の街を元気にしたい」と、地元の青年たちとまちづくりのネットワークが発案して生まれ、今年で20回を迎え、地域の春の風物詩となっている。

本祭りのオープニング・セレモニーで実行委員長の久保木慎一さんは「20年前はステージと模擬店5店で歩行者天国もありませんでした。地域の支援があって思いが一つになりました。一緒に木の下で楽しもうという理念の通り、満開の下で楽しんでもらいたい」と挨拶した。

恒例のパレードは天候不良の予想から中止となったが、セレモニーでは桜の花が咲く中、第二中学校吹奏楽部が元気に演奏。ステージでは、お囃子などが披露され、大久保東小合唱部は「桜の下で」ほかで歌声を会場に広げた。

校庭では二中の生徒も協力した昔遊びのコーナーなども設けられ、子供たちが楽しく遊ぶ姿が見られた。開放されたハミングロードでは模擬店が賑わい、消防車や白バイなどの体験試乗に大勢の家族連れが並んだ。

桜の花の下、演奏する第二中学校吹奏楽部

被災地を忘れず復興願い
3・11追悼イベント

「3・11震災地を決して忘れない！」が3月11日、京成津田沼駅前広場で開かれた。

竹宵の会&3・11実行委員会の尾曽昭雄さんは「県外避難者は大変な思いをしています。来年も再来年もどのような状況にあるか確認したい。すべての人の復興を願いたい」と挨拶した。会場では山田路子さんと林作衛さんが篠笛を奏で、立川かずささんの復興支援ソング「花は咲く」に集まった人たちも声を合わせた。福島県双葉町出身の千代田信一さんは「むごい、悲しい、情けなく、悔しい」と郷里に帰れない気持ちを語り、切々と福島慕情を歌い上げた。

オービックシーガルズのコーチ陣や選手たちも募金活動に協力し、追悼と復興応援のための黄色いハンカチに大勢がメッセージを書き入れていた。竹宵の会では集められた支援金を使い、南相馬市の仮設住宅で暮らす人たちに、野菜などを届ける。

篠笛を奏でる山田路子さん